
魔法少女リリカルなのは 零の迷い人

楊森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 零の迷い人

【Nコード】

N6931L

【作者名】

楊森

【あらすじ】

転生して原作介入！ 此処に新たな機人が誕生！

設定変更につき、タイトル変更

零話

「おい、こら待ちやがれ！もう一度話せ」

「ええと、天界での事故により、貴方の寿命が激減して死亡、アフターケアとして貴方を転生させる事が会議で決定されました」

orzマジかよ……………待てよ。

「済まんが、蘇生は無理か、無理な場合、転生先等は選べるのか？」

「肉体が有れば蘇生可能ですが、火葬されてしまって肉体が有りません、転生先はアニメや漫画の世界なら平行世界に転生可能です」

「その場合、原作介入とか原作崩壊は……………」

「OKです、平行世界ですのでそういった心配は有りません」

「なら飛ばす世界はリリカルなのは第1期、転生時期は開始1年前、オリジナルの人物でスバル、ギンガの兄、カイトとして転生、能力とかも有り？」

「それ位の融通は効きますよ、何でしょうか？」

「能力はアストレイの名を持つ機体7機の能力をカード化、ネギまの千の絆に酷似したカードホルダーに挿入する事でバリアジャケツト・武装として使用可能、ISは天地魔闘、内容はゴニョゴニョと……………大体これ位かな、IS発動時には専用モード・GGGに強制移行する、魔力はEXランク」

「では、他に要望は？」

「後、剣型のデバイスを一本」

「分かりました、では、いつてらっしゃいませ。因みに武装とかは色々混ぜこぜにしたから！」

「テンプレかい！」

足元に突然空いた黒い穴に落とされた。

電話・・・・・・・・介入と交渉（前書き）

滅茶苦茶無理矢理です

電話・・・・・・・・介入と交渉

転生して一年、クイント達に保護される前に研究所を脱走した俺は戸籍を捏造、カイト・ヒイラギとして生活している。

「今日で一年、俺も10歳に成った、原作崩壊を始めようか」

一旦、海鳴市に渡る事にし、数年を過ごした家に、一時の別れをする。

「さてと、まずは家を見付けて、次にプレシアに接触するかな」

「ふう、偽装しておいて正解」

戸籍を捏造し、『柊 海斗』として借家を借りて海鳴市に移住完了。ジューエルシードはまだみたいだな、大体次元震発生辺りで介入するかな。

観察中……

「おうおう、派手だね」

眼前でぶつかり合う二人を見ながら、この感想は有りだな。

「あつ、ヤバいな」

ドオオン！

レイジングハートとバルディッシュ、ぶつかった際の魔力衝撃に反応し、ジュエルシードが暴走を始め、天空を貫く巨大な魔力の柱となる。

「馬鹿がッ！」

暴走を止めようとフェイトがグローブごしに、ジュエルシードを握り締める。

「馬鹿か、お前は」

瞬動でフェイトの背後に姿を現し、襟首を強引に引っ張ってアルフの方へ連れていく。

「あんた、何者だい！？」

「噛み付くな。それと無茶する奴だな、全く死ぬ気かよ、其処で見てろ。行くぜ！」

シーリングモードへ移行

既にSet upしてるので、アストレイ ゴールドフレイムの装甲に身を包んでる。350mmレールバズーカ「ゲイボルグ」を構成え、ジュエルシードの魔力柱にぶっ放して、沈静させる。

「『封印Ver.』、さてと、パッキン娘、ほれ！」

封印したジュエルシードをフェイトに投げ渡す、序でにこの間見つけたジュエルシードをなのは達に渡しておく。

「おい、白服娘、コレやるわ」

「ほへっ！」

驚いてる間にさっさと逃げよ。

逃げた後、直ぐにプレシアの下に向かうか。

「さてと、プレシアに接触するかな、座標は確か『876C44193312D6693583A1460779F3125』だったか」

指定座標地点に『時の庭園』を確認、いけます

次元空間内を航行する艦船を確認、時空管理局巡航し級艦 識別信号からアースラのようにです

「アースラか、先の次元震で管理局が嗅ぎつけたか、ほつという良いぞ、アルカナ『次元転送』」

了解、次元転送発動

時の庭園内

「なんか、昔の神殿みたいな感じだな」

「そうかしら、招かねざるお客さん、何の用かしら？」

壊れてんな、それに大魔導士と自称するだけはあるな。

「カイトだ、用件はフェイトだったか、貴方の娘について話にきた」

「娘？あの子が？私の娘は「アリシア一人だけか」なっ！？」

「アンタは馬鹿だな、嫌、優し過ぎるか」

「あなたに、何が分かる、あの子はアリシアが蘇生するための道具、代替物よ」

「分かる気なんて、更々無い、死んだ娘の代わり？馬鹿かアンタは、貴方の娘の『アリシア・テストロツサ』はこの世に一人だけだ、代わりなんて居るかよ！フェイトはアリシアの代わりなんかじゃない、あんたのもう一人の娘『フェイト・テストロツサ』だ、貴方はあの子の母親だ、これを聞いてフェイトにどう接するかは貴方次第だ」

「待ちなさい、貴方は一体何者？」

「只の魔導士だ、変なレアスキルを持つな」

「レアスキルを持つ時点で只の魔導士じゃないわよ、それにしても悩みが無くなったわ、フェイトをお願いできるかしら、カイト？」

「返事はNOだ、俺に託すくらいなら目的を話して、フェイトを娘として認めてやれ」

「それもそうね」

「俺はあいつに会えないから、ちゃんと和解しておけよ」

「ええ、ありがとう」

「じゃあな」

フェイトが来ない内に帰る為に、逃げる様に帰って行く。
内心話している間、冷や汗が止まらなかったカイトであった。

参話・・・介入と原作破壊！

同日夕方……海鳴公園

確かフェイトが強引にジュエルシールドを奪取しようとして、怪我するんだっけ。

「おうおう、KY^{クロ}が乱入したぜ、良い雰囲気^{クワイ}が台無し……《アルカナ》トランス、『天』Set Up」

ミラージュコロイドで姿を消してつと、ちょこちょこつとジュエルシールドを強奪……完了。

「ほへっ!？」

「ジュエルシールドが消えた!」

「消える訳無いだろう、馬鹿かお前等？」

「あつ、この間の謎口ボ……じゃない!」

謎口ボ……ひねりの無い見たまんまのネーミングかよ。

「天^{アマツ}だ、先に名乗とけば良かったかな」

「君達、僕は無視かい？」

「だって、同じ年位の奴の言う事何ぞ聞く気無いし」

「僕は14歳だ!」

「……………4歳年上で、背丈同じって、まあ将来伸びるから悲観すんなよ」

「そんなに同じ年位に見えるのか!？」

「ばつちり、それとこっちの策略に簡単に引っ掛かってくれてサンキュー」

『それ位で良いかしら、時間稼ぎは?』

「もうちょい、KY弄りしたかったんだけどn「誰がKYだ!？」お前だ、それと話に割り込むな」

「それで、貴方に彼女を逃がすメリットは有るのかしら？」

「只でさえ、危険物が海鳴に有るからな、回収要員が減るのを防いだだけだ、オサラバサラバ!」

影に足をつっ込んで逃げるーネギまの転移魔法を再現してみましてー何か叫んでるが関係無い、俺は柊 海斗だしね。

なのはは管理局に手を貸してたな、次の介入はフェイトが海上で無茶して、なのはが助ける時かな。

「と思ったあの日が懐かしいぜ、アルカナ、マガノイクタチ展開準備!」

『マガノイクタチ展開』

「マガノイクタチ発動!!!」

マガノイクタチを発動すると、周囲の魔力素を吸収し巨大な魔力球を作り上げる。

術式を展開して、それを雷をして海に打ち込む。

すると、ジュエルシードが海中から浮上し、竜巻が発生する。

「……………（余りの威力に絶句）、これは封印するか、アルカナ、マガノイクタチを五重プロテクト、もう二度とこれは使わない」

「おい、これをいったいどうするつもりだ？」

「封印任せた、あの子達と一緒にな」

背後に現れたフェイト達を見ずに指差す。

「フェイトちゃん!」

「ともかく協力してね、こっちはちよいとデバイスがヤバいから、封印出来ないし」

「分かったの!フェイトちゃん協力して、それでジュエルシードをきっちり半分こ!」

「……………（コクン）」

「アルフ、二人のサポートだ!」

「分かってるよ!」

竜巻六本に挑む少年少女達四人、クロノ？何か俺を睨んでから、手は貸さないだろう。

『チエーンバインド！！』

ユーノとアルフ、それぞれのバインドが竜巻を縛り付ける。舞台は整った。

「サンダー」

「デイバイン」

「レイジ！」「バスター！」

二人の砲撃でジュエルシードは沈静化し、着弾後の煙の向こうに六個のジュエルシードが姿を現す。

『プレシア、次元跳躍魔法は可能か？』

『ギリギリイケるわ、どうしたの？』

『合図したら、フェイト達を避けて、無差別に放て、後は何とかするからよ』

『分かったわ、フェイト達を頼んだわよ』

プレシアに念話し、ある程度の指示を出す。交渉の始まりだ。

「クロノ・ハラオウン執務官、取引しないか？」

「取引だと？何の真似だ？」

「有益な情報を渡す、その情報とは、管理局で開発中のカートリッジシステムの改良データ」

懐から一本のUSBメモリを取り出す。

「アームド、インテリジェント問わず搭載出来る最新型のカートリッジシステムのデータだ、俺のデバイスに既に搭載済みで、検証データも入ってる」

「其方の条件によるが？」

「此方の条件は三つ、一つ目、俺に関しての詮索は無用、二つ目、俺が何をしようが無視してくれれば構わん、三つ目、これは後で良いかな『プレシア、今だ』」

『別次元からアースラと戦闘空域への攻撃を確認！』

「何だって!!」

「良く考えくれよ、アデュー！」

ジュエルシード六個とフェイト達を連れて、混乱の内に《時の庭園》へと離脱する。

さあ、原作崩壊だぜ！

閑話……アースラでわ

「海鳴市海上に封時結界発動！」

「フェイトさん達かしら？」

「違います！この魔力反応は天君です！って何よこれ！？」

画面には砲撃魔法と思わしき魔法を行使しようとしているアストレアが映る。

「そう言えば、あの子のデバイス、見た事ないタイプ、負担は大丈夫かしら？」

「それより艦長、もしかして彼は陸に無いなら、海に有ると結論付けて、魔力流で強制発動させる気じゃないですよね？」

「そうだとしたら危ないわね、クロノ至急現場に向かって《ドガン！》何！？」

「……天君が行使した砲撃魔法の滅茶苦茶な威力で、ジュエルシード六個暴走開始！」

「封印してきます！」

「あつ、ちょっと待て、君達！って行っちゃった」

「クロノも引き続いて現場に向かって、彼がどう出るか分からないから、監視して」

「分かりました、艦長」

・・・・・・会談

「着たわね、オーガ」

「ほれ、お望みの品と…『話すのか?』」

『まだよ、まだ話せない』

『大人の都合か』

『違うわ、まだ心の準備が出来てないだけ』

『そうか、なら決闘させるか?』

『決闘?』

『一度、向こうの白服の魔導士と腹の中曝け出して戦わせてみたら?』

『そうしてみるわ』

『じゃあ、俺は是で』「入り用が有ったらまた呼びな」

「ええ、そうするわ」

プレシアはフェイトの眼を真っ直ぐに見据えながら問い掛ける。

「フェイト、貴女の本心を聞かせて頂戴、あの白服の女の子をどう思ってるの？」

「……………分からない、私はあの子に何を見て、どう思ってるかが」

「決闘でもしなさい、立会人並び仲介役ならオーガがするそうよ」

「全力で闘います」

誰に似たのかしら？私はあるな風じゃ無かった筈だけど。

「プレシアから暗号通信、何々『フェイトが決闘を了承、仲介役並びに立会人を頼む』か、暗号化して返信『了承されたし』っと」

手筈は整った、アースラにでも出向くか、ジュエルシード三個は向こうのだし。

「艦長、極秘回線に何者かが侵入、通信を希望しています！」

「繋いで頂戴、こちらは時空管理局本局所属次元航行艦アースラ、艦長のリンディ・ハラタウンです、ご用件は何でしょうか？」

「明日昼過ぎに海鳴公園に現地協力者と来られたし、随行者は艦長並びに貴艦所属の執務官と後一人はそちらで決めてくれて構わん、現地協力者が来ない場合はこの会談は決裂、以上」

「ちょっと待って！」

「済みません、艦長、回線を強制的に閉じられて、逆探出来ませんでした」

「ともかく、勝負は明日の昼よ、クロノとなのはさん達に伝えて頂戴」

「分かりました」

海鳴公園……昼過ぎ

「さてと……準備はこんなもんな、後は封時結界」

「貴方が昨日の通信者かしら、天君？それでは何の真似かしら？」

「一応、会談を指定したのは自分なのでな、細やかなお持て成しだ、いらないならコレは家で食べるが？」

格納領域にしまっておいた翠屋の箱を取り出す、中身はシュークリームだ。

「いるわ（よ）！」

「艦長、エイミィ！」

「諦めろ、クロ助、女性に甘味で諦めろと言う方が無理だ」

「何で、君がそのあだ名を知っている!？」

「有名だぞ、アースラの執務官は真っ黒クロ助だと」

「そんな理由か!！」

「彼らも来たみたいだから、会談を始めようか？」

オーガが指差す方向に此方に駆けてくるのは達の姿があった。

「先ずはこの会談に応じてくれた礼を述べよう、提案者のオーガだ、此処には仲介役的な感じで来ている」

「プレシア・テストロッサとの関係を聞こうか？」

「雇い主で此方は傭兵的な感じかな」

「何故、この会談を開いたのかしら？」

「それなら、向こうの要件を伝えた方が早いな、向こうはフェイトと……ご免、名前知らないんだけど？」

「高町なのはです」

「高町との一対一での決闘が望みだ、ルールは一対一、時間無制限、非殺傷設定、どちらかが魔力切れ又は魔力ダメージによる気絶、負けた場合は保有するジュエルシードを勝利者に譲渡する、内容は以上だ、この申し出を受ける受けないは自由」

「受けます!！」

「なのは!？」

「君は何を言ってる」「黙れ、KYクロ助」誰がクロ助だ!」

「本当にこの申し出を受けるんだな？」

「はい、フェイトちゃんとちゃんと話したいから」

何言っても聞かないだろうし、俺的には名シーンが見れるから、万々歳なんだけどね。

会談が終了してから、俺はプレシアに連絡を入れ、OKされたと連絡しておいた。

場所は原作同様、海鳴市近海の海上、時間は朝方、詳細は折って連絡する。

伍話……決闘・事後処理（主）

「立会见届人天、決闘者高町なのは、フェイト・テストロッサ、観覧者ユーノ・スクライア、使い魔アルフ、これより決闘を開始する！両者位置へ！」

なのはとフェイトが飛翔し、一定距離を置いて対峙する。

「3……2……1、決闘開始！」

とまあ、こんな感じで始まったんだが、堅いな（なのは）、速いな（フェイト）、的な感じの感想、あつ、SLBだ。

「コレが私の全力全開！受けてみて！スターライト・ブレイカアアア……！」

決闘も終盤、バインドで拘束されたフェイトに特大収束砲撃が放たれる。

「……………《雷の暴風》！」

「はいっ！俺の魔法！？しかも遠隔発生！？」

「そっいや、何かコツコツと術式を構築してたね」

SLBと雷の暴風、どちらも放出が収まり、煙が晴れていく、其処には魔力ダメージで気絶したフェイトとフラフラしているなのはの姿があった。

「おいおい、完全でない雷の暴風喰らって気絶しないとは、滅茶苦茶な奴だな、本性は悪魔か？」

「悪魔じゃないよ！」

地獄耳、独り言に突っ込むな。さて、どうでる、プレシア？

『アルカナ、フェイトは？』

『魔力ダメージで気絶、向こうもフラフラ、結果的には引き分け、勝負的には負けかな』

『フェイトとアルフを回収して、預けたジュエルシールドは引き渡して置いて』

『了解、後は？つかこれからどうするんだ？』

『特には無いわ、余生をフェイトと過ごすわ、そう無いでしょうけどね』

『分かった』

「おい、ユーノ、これを渡しとくわ、フェイトが回収したジュエルシールド9個」

「ああ、何時から持ってたの？」

「始まる前にこっそり受け取った、フェイト達は連れて帰るな」

「えっ、ちょっと!？」

フェイトを担いで、アルフは襟首を掴んで、時の庭園に転移する。さあ、ビックリどつきりシヨアの始まりだぜ。

「連れて戻ったぞ」

「はい、報酬の権利書、後は用は無いわ」

「待ちな、種明かしの時間だ、フェイトも起きた事だしな」

「種明かしって何の事だい？」

「悪いがプレシア・テストロッサについて調べたよ、確かに一人娘が居た、しかし数年前に死去してるな、娘の名前はアリシア」

「貴男は何を？」

「SHOT！」

攻盾システム「トリケロスからランサーダートを放ってして、隠し部屋の扉を破壊する。」

「その生体ポッドに保存されている少女がアリシアだ、そしてフェイト……プロジェクトF・A・T・E、当時彼女が研究していた『使い魔を超える人造生命体の生成、もしくは死者蘇生の秘術』の開発コード」

「止めて！」

プレシアやアルフが魔法を放って中断させようとするが、バインドで拘束する。

「最後まで聞け、確かに最初は出来損ないとししか見てなかっただろ、今じゃどうだ、辛い話を聞かせたくないために実力行使、優しいお母さんだな」

「そっぴゃ、プレシァあんな」

「過去には戻れない、でもその娘はあたしの娘フエイト・テストロツサよ！その娘を傷つけるなら、いくら協力者の貴方でも！」

「種明かし終了、あんなから今の言葉が聞けりゃ俺はそれでOK、4人で幸せになって貰うぜ、アルカナ、リリース」

アルカナからカードを一枚出す。原作破壊に必要な手札の一枚だ。

「4人？一人足りないけど」

「其処に養女を足せば4人だ、アリシアという名前のな、戸籍とか必要なのは全て手配済みだ、さてと魔法カード『死者蘇生』てか」

蒼色の閃光が広間を走り巡る。

ポッド壊さないとヤバいな、窒息死されたら無意味だ。

「さてと、よいしょっと！」

ビームサーベルでポッドを割る、ふう、傷つけずに割るのって面倒。

「何から何までありがとう」

「序でにこの2つもね」

「何かしらこれ？」

「『エリクサー』と『若返りの秘薬』」

*「エリクサー：別名『生命の水』」

嘘か実か死者すら飲めば蘇生可能らしい。因みに一国の王は国を売ってすらも求める、錬金術の秘薬中の秘薬。

*若返りの秘薬：その名の通り、若返る事が可能。

*錬金術：秘匿をモットーとする魔術の中でも特に秘匿される魔術、基本は等価交換、金と人体錬成はタブー」

説明文を出して、渡した小瓶に入っている琥珀色の液体と赤色の液体について説明する。

「こんな感じかな、効能に関しては、服用すれば一目瞭然、学校もあるから通えよ」

「ありがとう」

「何から何まで世話になるね」

「ありがとう」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございました」

「応、また何処かで！」

別れと再開の挨拶を述べてプレシア達は手配したマンションに転移していく……一人多い？リニスを魔法生物的な感じで蘇生させたかな。

.

閑話……転入

どうも、高町なのはです、つい最近出会った悲しい目をした少女
フェイト・テストロッサちゃん。
彼女との決闘から数日、私は出会っ前と少し違う日常、魔法の練習
もしながら過ごしています。

「はあ、お話出来なかったな」

「だああああ、辛気臭い溜め息をつくな、鬱陶しいわね！」

「戻って来てから、こんな感じだね、なのはちゃん」

「あああも何でこんな感じなのよ！」

「それよりチャイム鳴ったよ、アリサちゃん」

「休み時間に絶対聞き出してあげるんだから！」

先生が教室に入ってきて来ると、騒めきが起るが下を向いているのは
は気付かない。

「先週、急に決まりましたが転入生を紹介します」

「フェイト・テストロッサ・フォードです、宜しくお願いします」

「ふえ！？」

「高町さんと知り合いですか？」

「数日前に来た時に、街を案内してもらいました、あの子の隣で良いですか？」

「知ってる子の隣なら心強いわね、じゃあ席は高町さんの隣で」

お決まりの質問タイム！

「ねえねえ、何処から来たの？」

「隣街の遠見市」

「何か趣味有る？」

「うーん、体を動かすのが好き」

「何処に住んでる？」

「翠屋だったかな、その近所のマンション」

「ふえ！全然知らないよ！」

とまあ、こんな感じでこたえましたとさあ。

昼休み

「改めて自己紹介ね、フェイト・T・フォードです」

「高町なのはです」

「私は月村すずか」

「あたしはアリサ・バニングス」

「えーと、名前で呼んでも良い？」

「当然でしょ！」

「フェイトちゃん、何時こっちに来たの？」

「なのは達と別れた翌日位かな、遠見のマンションを引き払って、
こっちのマンションに来たから」

「そうなんだ、あれプレシアさんは？」

「母さんも一緒、これまで一人になる事が多かったけど、研究も終わったし、アリシアの療養も兼ねてね、あつ、アリシアは双子の姉
なんだけど……」

『管理局の人から聞いてると思うけど、アリシアを蘇生されたの天
さんによつてね』

「どうかしたの？」

「五歳の時に事故にあつて、つい最近まで植物状態だったから双子
には見えないけどね」

『これは本当』

真実と嘘が入り交じった言い訳でなのはを誤魔化しておく。

.

二章・・・はやてとエンカウト

第一期介入終了から数日、はやてとのエンカウトだな、手っ取り早く図書館だな。

マジで居たよ、はあゝ取れないなら無理するなよな。

「ほれ、この本か欲しいのは？」

「あつ、ありがとうな、えゝと、誰やる？」

「海斗、柊 海斗だ、よろしくな、子狸」

「誰が子狸や！？」

「お前だよ、子狸、名前が分からん以上は見た目と第一印象からのあだ名をつける事になっているのでな」

「子狸ちゃうわ！うちの名前は八神はやてや！」

「はやてか、良い名前だな、序でだ、他に欲しい本は有るか、とつてやるよ」

「アレとアレや、なあゝ何歳なん？」

「数えて12歳だ」

「つて事は……11歳でうちより年上か」

「そうなるな、他には？」

「無いよ、海斗君、お昼は？」

「まだだな、適当にジャンクフードでも……」

「何なら、うちでご飯なんてどうや？」

「金も浮くし、ありがたい申し出だ、快く受けよう」

こうして八神家に向かう事に成ったが……はやて、人を信用するのが早いぞ。

「おじやましくすって、何かでかい家だな」

「せやね、うち一人暮らしやし」

「そうか、すまない」

ちっ、暗い顔させるの嫌だから、魔力抑えて一般人してんだ、絶対あの娘も救けてやる。

「何にしよ……軽いモノで良いぞ」……じゃあ、親子丼や！」

軽いモノじゃないぞ……親子丼って、待てよ。

「はやて、ちよいと料理遣らして、オレ流の親子丼喰わせてやる」

「うちの舌を満足させられるかな？」

「舐めんなよ」

出来たぜ、オレ流の親子丼が。

早いって？調理過程は飛ばしてなんぼよ。

「親子丼って、これはカツ丼やと思うんやけど？」

「論より証拠食べてみな」

「うん？衣が卵や！鶏肉も減茶苦茶美味しい！」

「俺様の農場で育てた鶏の肉と卵だ、美味くて当然だ！」

「また会えるってええな？」

「会えるぞ、どっちみち学校に行っていないからな」

「あつ、そうなんや、じゃあ明日も？」

「当然だ！それじゃ、また明日な！」

「うん！また明日！」

二章・・・はやての誕生日パーティー

明日は6月3日、はやての誕生日で守護騎士達との出会いの日。

「なあ、はやて、お前の誕生日って何時？」

「何でなん？」

「何となく気になった＋友達の誕生日位知っておいても損は無いからな」

「ありがとうな、うちの誕生日やったら明日なんや」

「だったら誕生日パーティーでもするか、駅前の翠屋のケーキ買ってさ、二人だけのささやかな誕生日パーティーをな」

「そうやな、楽しみやな」

「1時位にケーキ買って行くわ、料理とかは準備するから、何にも作るなよ」

「美味しい料理を頼むで！」

「おう、任しとけ！」

.....深夜.....

闇の書.....否、夜天の魔導書が覚醒したか、この時点での介入は無しだ。

「翠屋イチオシケーキGET!」

さてとはやても魔法の存在も知ってる筈だから、別荘から直接、材料を取り出せるぜ。

そんな事を思っているうちに、はやての家に到着した。

ピンポーン!

『はい』

「オラー」

「ふん!」

ガチャリと音が開いた瞬間、赤毛の少女がハンマー持って襲い掛かってきた……ので、柔道の小手返しで拘束する。

「いきなり人に襲い掛かるか、普通はよ?」

「離せ!」

「ヤダ、また襲い掛かって来られたら迷惑だし」

「あつ、海斗君って何してるん?」

笑顔怖っ!なんか黒いオーラが放出されてるし、なんか魔王モード!あつ、傍目から見たら押し倒してる格好に見える訳ね。

「ちょ、ちょっと待て、はやて！襲い掛かれたから無力化しただけだ、やましい考えなんぞこれっぽちも無いからな！」

「ほんまかな？」

「神仏に誓って……悪い、俺って無神論者だから誓えない」

転生させて貰って何様だと？向ここのミスなんだからノーカンだつ
つうの。

「ともかく家に上げてくれ、ケーキを冷蔵庫に入りたい」

「分かったわ……ケーキは？」

「ここに入れてある、アルカナ、ケーキ出して」

『了解』

アルカナの格納空間から、事前に入れておいたケーキを取り出す。

「お前、魔導士か！？」

「どつかと言えば……魔導騎士？術式両方使うし……お前、何で知
つてんだ？」

「うっ！」

「はやて、友達だったら隠し事は無しだよな？」

「…………分かった」

「はやて!?!」

「大丈夫だよ、ヴィータ、海斗君やったら分かってくれるさかい」

何とか家に上げて貰って、はやてと『お話』しました。

「あゝ、つまり、はやてが生まれた頃から有ったこの本は『闇の書』と呼ばれる魔導書で、あんた等四人?（三人と一匹）は闇の書とその主人を守護する守護騎士で、今現在の主人ははやて自身か……収集すれば足の麻痺が治るらしいが、収集するのか?」

「しいひんよ、他人に迷惑かけて体を治しても誰かには恨まれるしな」

「パーティーが二つになっとな」

「二つ?」

「誕生日と守護騎士の歓迎、食材は多めにあるから、採りに行くかな、はやても付いて来る?」

「ちょっと行ってみたいけど、大丈夫なんやろ?」

「そこは守護騎士に任せた、食材調達してる間は別荘に居てもらっただけだし」

「じゃあ、行こう!」

目がキラキラしてるし、駄目だこりゃ。

「主はやて!それは軽率s「無理だぞ、そうなった以上は人の話を聞かないから」くっ」

「はやて、使ってない部屋貸して、そうじゃないと外から見られた時にヤバいから」

「分かったわ、こっちやから付いてきてな」

この後、別荘(ダイラオマの魔法球)を出したら、ミニチュアだと言われた、論より証拠だと思って転移陣を張って、別荘突入!

……別荘内部……

「……広い」

「何と不思議な」

「そうですね」

「何かいい臭いがする」

「……………」

はやて、シグナム、シャマルは普通の反応だが、ヴィータ、食い意地はり過ぎ、ザフィーラは何か喋れ!

「いい臭い?あっほんまや」

「仕込みの臭いだな、俺のフルコース、未完成だが食わせてやる」

前菜ーBBコーン

スープーセンチュリースープ

魚料理ーフグ鯨

肉料理ージユエルミート

メインディッシュー????

サラダー????

デザートー虹の実

ドリンクードッハムの湧き酒

「主菜が無いが、其処は誰にでも食べられるのを用意するは、楽しみにしてな」

この後、全員で未完成フルコースを頂き、大絶賛されました。
ヴィータに特製アイスをプレゼントしたら喜ばれたぜ。

二章・・・介入

「主はやて...」

主が倒れた、その原因は分かっている、闇の書による侵食、覚醒前から蝕んでいた主の体が、覚醒により爆発的に進んだ。

治す方法は只一つ、闇の書の収集だけだ、主はやては望まないが、我らは貴方との暖かい生活を手放したくない。

「我らの不義理をお許し下さい！」

「ちょい待ちな」

「貴様、何者だ！」

「只の助っ人で名はアレス、リンカーコアの収集だろ、ほれ前払いの俺の魔力」

収集行動を始めようとした守護騎士達を止め、助力を申し出る。手土産は事前に取り出した自身の魔力だ。

「何が目的だ？」

「目的か、夜天を作り出すためとも言っておこうか」

「どついう意味だ!？」

「長い話になるが良いのか、収集の時間が無くなるぞ」

「くっ、それ程言うなら付いてこい、責任はもたんぞ！」

「了解だ、トランス、『フルウェポン』」

カイトは、フルウェポンのブルーフレームに換装する。

「そんなこんなで収集に参加する事になったんだが……こいつ弱いな」

「竜種倒した奴が弱いとか、口にすんな！」

「竜種を倒すとは、中々の強者だな、今度模擬戦でも申し込むか」

（ここから小声で）

「なあ、烈火の将ってバトルジャンキー？」

「筋金入りのな」

「俺って目を付けられた？」

「頑張れ、一応応援しておく」

「一応礼を言っとく」

……因みに竜種はこんな感じで倒した。

「おっ、何か良い感じの獲物を発見！」

アイズが何かを見つけたみたいだが、その視線の先には……深緑の鱗に顎下の棘状の突起物、背中全体と尻尾に棘がある竜種がいた。

「お試し一発目!!」

右腕に装備したM68キャットウス 500mm無反動砲から実体弾を連射し、竜の横っ腹に命中する。

「
ッ！」

「なんつう大声だ、もう二、三発だ!!」

また連射して、今度は竜の膝や翼幕に命中する。

「
ッ！」

竜が猛スピードで突進してくるが、飛んで避けながら、ビームサベルで背中に斬り裂く。
ビームが肉を焼く匂いが鼻孔に入ってくる。

「
ッ！」

「オラッ!喰らいな!!」

肩に装備した8連装短距離誘導弾発射筒と足に装備したM68パルデウス 3連装短距離誘導弾発射筒からミサイルを連射して、竜の目を潰す。

「
ッ！」

「暴れてるな、そろそろ片をつけるぞ!!」

強化ビームライフルで脳天を貫き、最後にビームサーベルで、竜の首に叩き切った。
竜の首は地に転がり、体は地に倒れこみ、二度と起き上がらなかった。

…回想終了…

* 集結果

アイズ（カイト）の魔力… P 5 0

竜種… P 2 0

.

二章・・・介入（後書き）

「なあ、作者、今回倒した竜種ってリオレイア？」

リオレイアか、リオレウスにするか迷ったがリオレイアに決定したぞ。

「歯応え無かったぞ」

ランボスだと一方的な殺戮タイムだからな、感想お待ちしております！

プロフィール

名前：カイト・ヒイラギ

年齢：10歳（開始時）

身長：135cm

体重：kg

所属：私立聖祥大附属小学校5年1組

魔導士ランク：空戦A

魔法形式：近代ベルカ式

魔力光：青

戦闘スタイル：能力を利用したオールマイティー、もしくは魔力に任せた力押し、武装に神がスパロボ好きな為に、色々と詰め込まれている

性格：冷静沈着で温厚、その分キレるとヤバい

容姿：鉄の森次さん

概要：天界の事故に死亡し転生

能力：能力をカード化、ネギまの千の絆に酷似したカードホルダー『アルカナ』にカードを挿入する事でバリアジャケット・武装として使用可能、IS発動時には専用モード・GGGに強制移行

IS：天地魔闘：？？？

デバイス

『アルカナ』カードホルダー

『ブリッツ』剣型デバイス
モード・GGG時『??』

*ガンダムアストレイ

共同開発の際用いられた大西洋連邦のMS開発技術を無断使用して
完成させた機体

・ゴールドフレーム

・レッドフレーム

・ブルーフレーム

・グリーンフレーム

・ミラージュフレーム

/MBF-P01 ゴールドフレーム

建造当初から唯一、手に連合格のプラグを持ち、連合軍MS用の
武器を使用できるという、他の機体との構造上の相違点を持つ機体、
数度改修されて、殆ど原型を留めていない

/MBF-P02 レッドフレーム

主装備ガーベラ・ストレットを扱う為に、機体自体にも日本剣術に
対応できる調整が加えられた（ロウ自身も蘊・奥老人に刀の実践指
導を受けている）、追加装備の奇抜さは他のアストレイの追従を許
さない

/MBF-P03 ブルーフレーム

「オプション装備のスペック検証機」（青色はオーブで局地戦仕様
を表す）であり、オーブ・ザフト・連合を問わない様々なデータが
インストールされていた、かといって軍用品に限らない多彩なオプ
ションも設計・導入し、その性能や外観をめぐるしく改造・変化
させていった事や、アストレイ標準装備ですら携行の有無が多々み

られた点などは特徴的

／MBF-P04 グリーンフレーム

戦闘支援AIが組込まれ、それと連動したセンサーの強化が行われている（このため機体各部のセンサー類は新造時のアストレイより優れている）、センサーとの連動により、「戦闘状況を分析し、完全な回避行動を可能とする」能力があるとされている

／MBF-P05 ミラージュフレーム

特徴として、頭部には額に1本、後頭部に2本のブレードアンテナが配されており、ブルーフレームサードのように全身にブレードが装備（両腕で1対、両脚で3枚1組のを1対）されている。また、レッドフレームの様に日本刀型の実体剣が装備されている、更にコマンダーモード（通常形態）からグラディエーターモード（格闘形態）への変形機能が追加され、頭部が180度回転し後頭部の第2の顔が出現、全身のブレードが展開され、まるで鬼のような姿となる

二章……第二期開始

「ヴィータの奴め、人の忠告を無視したな」

季節は巡りに巡って、A s開始の12月です、因みに目の前にはヴィータが展開した結界がある。

12月、街中、デカい魔力……高町なのは襲撃か、アレ程人から奪うなど言った効果無しかよ。

「仕方ないか、アルカナ、トランス《ミラージュフレーム》Set
up」

頭部には額に1本、後頭部に2本のブレードアンテナが配されており、全身にブレードが装備（両腕で1対、両脚で3枚1組のを1対）、腰に日本刀型の実体剣を装備する。

「準備完了、ミラージュ、出る！」

「『ラーケテン・シュラーク』！」

おいおい、幾等何でも逆ギレし過ぎだろう、ヴィータ……そろそろかな、フェイトとユーノが到着するのわ、アイゼン受け止めたら、ヴィータを回収するか。

ガキーン！！

やっぱり、ユーノは驚くよな、半年前に戦った相手が目の前に居て、

友達宣言したんだからな。

「助けますか、オラツ！」

「うわあああああ！」

ヴィータの体にチェーンバインドを巻き付けて引っぱり寄せる。
無理矢理だけど、確実な手段だから有りだね？

「ミラージュ、いきなり何しやがる！それと頭に何故手を置く？」

「何をだど？自分自身の胸に手を当ててよく考えな」

「……………全然分かんないや」

「そうか、蒐集するのは魔法生物のみで魔導士には手を出さないと誓ったのを忘れたか？」

「あつ！？」

「この馬鹿！！お前の性でこれからの蒐集が困難になるだろうが！」

強化した握力で加減有りのアイアンクロー、でも怒ってる分加減になつてない。

「痛い痛い痛い！！！！ご、ご免なさい！！！」

「今はこれ位で許してやるが、次忠告破ったら、一週間はアイス抜きだ」

「（；）！！」

「惚けてる場合じゃないぞ、向こうは準備万端みたいだな」

《あー、テストス、シャル、旅の鏡で白服から魔力抜けるか？》

《大丈夫、行けます》

《様子見てイケたらやってくれ》

《了解しました、シグナムとザフィーラが増援として到着したみたいです》

《分かった、シグナムは金髪の魔導士、ザフィーラは使い魔を、ヴィータは二人のアシストを任せた、異論は？》

《無い（了解した）》

《作戦スタート！》

合図と共にそれぞれの相手に向かい、徐々にその場から引き離していく。

「ユーノ・スクライア、攻撃魔法は使えないが、補助魔導士としては一流……貴様からも、蒐集させてもらうぞ！」

「ラウンドシールド！」

「デバイス無しでこの強度、益々集しなくなったぞ！」

腰の天羽々斬【アメノハバキリ】を抜いて斬り付けるが、ユーノは

防御魔法で防御する、しかし、目論見は成功した。

「舐めるな！」

「意気が良いが、守る仲間が存在を忘れたな？それが貴様の敗因だよ！」

ユーノを蹴飛ばし、ビルに叩きつける。

それと同時に桃色の極太閃光が、離れたビルから放射され、結界を破壊する。

「破茶目茶な女、人間より悪魔か魔王よりだろう？」

「……………言い過ぎだと思っけど」

「ともかく、貰ってくわ！」

胸ぐらに手を突っ込み、リンカーコアから魔力を抽出、更に小細工してつと。

「ハハハ、貰って行くぞ、ユーノ・スクライア！」

短距離転移を繰り返して、足を捕まれないように小細工して、ヴィータ達と合流して魔力を渡しておく。

ヴィータを軽くこづいておくのも忘れずに。

第二章……再戦

もうすぐ、アイツ等との再戦だな、確かシャマルに仮面猫姉妹が、接触してきたな、猫姉妹には蹴りを数発叩き込んでお仕置きだ！

「ヴィータとザフィーラが結界内に隔離されたか、シグナム、この結界って、一部分破壊したら入れるよな？」

「入れるぞ、でもどうするんだ？魔力を大分必要とするぞ」

「アルカナ、トランス《パワードレッド》Set up」

強化型駆動システム「パワーシリンダー」を組み込み、背骨や背筋に相当するフレーム類が併せて強化され、見た目はまさにボディビルダーさながらの筋肉質を装着する。

そして、パワーシリンダーを駆動させると、肩アーマー、肘のロツクが展開する。

「赤い一撃【レッドフレイム】！」

洞察力で「物体である以上絶対に存在する・構造的物理弱点部位」を正確に見抜き、そこ目掛けてパワーシリンダーの大力で強引に殴りつけると、結界に穴が開き、その穴から結界内部へ突入する。

「お、居た居た、大丈夫か？」

「あの程度で、どうこう成る程ヤワでは無い！」

「そりゃそうだ、期待してるぜ、鋼の守護獣！それとヴィータ、小

話のオチと諺は違うぞ」

「何で知ってやがる!?!」

「さあ、何ででしょうかね?それより来るぞ!」

なのはにフェイト、アルフにクロノ（ユーノは多めに魔力を集したのでまだ回復しきってない）が身構える。

「黒いのは俺が戦る、後の奴は任せた」

『任された!（おうッ!）』

「行くぞ、真っ黒黒助!」

「誰が真っ黒黒助だ!?!」

「てめえだよ!全身真っ黒だから、真っ黒黒助だ!」

「ふざけるな!」

言い合いしながらも、攻撃や防御を行うので、はた目には痴話喧嘩に見えなくもない。

因みに侵入と同時にブルーフレーム セカンドGに換装している。

「ステインガースナイプ!」

「何のこれしき!」

自動的に目標を追尾する魔力弾を、ハンドガンで撃ち抜く。
アーマーシュナイダーを抜いて、クロノに肉薄し、斬り掛かる。

「ハアッ！」

「くっ！」

「悪いな、セイツ！」

アーマーシュナイダーで×字に斬撃を叩き込み、ビルに叩き込む。

クロスヶ撃破！仮面猫もそろそろ動くな。

、シャマル、そっちどうだ、

、何も無いわよ、誰！？、

現われたか！仮面猫！天上人の剣で断罪されな！

「簡易転移！目標^{マーク}シャマル」

簡易転移で目標を付けておいたシャマルの近くに飛ぶ。

「さあ、闇の書を使え」

「部外者は黙ってる！」

飛んで直ぐ様、ムカつく声が聞こえてきたから、横から飛び蹴り喰らわせてやった。

「チツ！貴様はイレギュラー！」

「滅多斬り！」

アーマーシュナイダーで滅多斬り！更に追加ダメージの……。

「光雷球！」

ビームサーベル・ライフル等の武器への電源供給する掌プラグから、電気と荷電粒子を放出して球状に帯電させ、そのままぶつけて攻撃する！

「さてと、結界をぶっ壊すか！」

折りたたみ式の砲身を持つ大型ビームライフルで結界破壊弾を撃ち出し、結界を破壊する。

、全員散開！集合場所で！

全員散り散りに逃げ、集合場所で会おうと言っておく。
追跡を撒いて、シグナム達に会ったら、シグナムにあの魔法を教えろとせがまれたが、はやてへの負担増加を盾に逃げた。

飛んだらクリスマス！

時間は流れて今日はクリスマス……AS最終決戦の日、何か時間の流れが早いな。

「畜生！寝過ぎた！急がないとヤバいぞ、こりゃ！」

仮眠してたら寝坊した、流石にあの広域収束砲撃位は援護しないと
な。

現在は、ミラージュフレーム・・・流石に遠距離からあの攻撃を凌
ぎ切れる自信が無かったからな。

この話をもって、この『魔法少女リリカルなのは 零の迷い人』は
打ち切りとさせて頂きます。

なお、この小説は作者自身の戒めと未熟さを痛感させる為に残させ
て頂きます。

このような駄作をお読み下さった読者様に感謝を込めて、この話を
借りてお詫び申し上げます。

敬具

作者・楊森

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931/>

魔法少女リリカルなのは 零の迷い人

2011年10月6日19時02分発行